

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26503002

研究課題名（和文）マックス・ウェーバーの音楽社会学を通じた聴覚文化論の展開

研究課題名（英文）Reconsidering Perspectives and Methodologies of Sound Studies, Studies of Auditory Culture through Max Weber's Music Studies and Methodological Writings

研究代表者

和泉 浩（IZUMI, Hiroshi）

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：40361216

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、人文社会科学の諸分野において特に国外において盛んになっている音、聴覚に関する研究（サウンド・スタディーズ、聴覚文化論）について、社会学での研究が国内外ともに不十分であるため、社会学のこれまでの研究成果をもとに、特に研究上の視点と方法に焦点をあて研究を行った。人文社会科学において音や聴覚の研究は、視覚に比べ行われてこなかった研究テーマである。本研究では特にマックス・ウェーバーの音楽についての研究をもとにサウンド・スタディーズ、聴覚文化論のこれまでの研究について検討した。このことを通じてそれらの研究の課題を明らかにし、それらの研究と社会学の研究とを結びつけ、展開するための基盤を示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to reconsider perspectives and methodologies of flourishing area of sound studies or studies of auditory culture through reexamining Max Weber's music sociology and his methodological writings, in order to develop sociological arguments on sound and auditory culture, and seek to clues to a methodological basis that interweaves Weber's sociology with sound studies. This study shows Weber's music sociology which focuses technical means of music based on his methodological consideration of sociology and social science can provide a methodological basis for refinement of methodology of sound studies. Furthermore, this study shows Weber's music sociology has a latent theme of musical hearing and could be developed as a study of modern rationalized musical 'ethos'. This study also examines the musical 'ethos' of Weber's discourses that is related to the creation of German national identity and modern conception of 'music' since late eighteenth century.

研究分野：社会学

キーワード：マックス・ウェーバー 音楽社会学 サウンド・スタディーズ 聴覚文化論 感覚の社会学 音楽的聴覚 音楽的エートス

1. 研究開始当初の背景

(1) 「視覚文化論」と近代批判としての「聴覚文化論」、サウンド・スタディーズ、身体と諸感覚についての人文社会科学での研究

ミシェル・フーコーやジャック・ラカン以降、視覚や「まなざし」についての研究がさまざまな領域で盛んに行われるようになり、視覚文化論（ヴィジュアル・カルチャー）と呼ばれる領域も形成され、視覚文化についての研究が行われるようになっていく。こうした状況にたいして、1990年代以降、特に近代において視覚より低い地位に位置づけられてきた「聴覚」に焦点をあて、聴覚や音、ノイズについて研究する「聴覚文化論」や「サウンド・スタディーズ」が特に国外で盛んに展開されてきている。また同時期から聴覚以外の諸感覚（触覚や味覚、嗅覚など）についての研究や身体についての人文社会科学での研究も盛んに行われていくようになっていく。

近代（モダニティ）は「視覚中心」（hegemony of vision）の時代とも特徴づけられており、そのためそうした諸感覚や身体の研究、聴覚文化論、サウンド・スタディーズは、近代の諸概念、そして近代の視角を批判的に検討しようとする試みでもある。

(2) 「ニュー・ミュージコロジー」の展開

これまでの音楽研究にたいして批判的視点に立ち、「社会的な」視点も取り入れた音楽研究である「ニュー・ミュージコロジー」が1990年代頃に登場し、芸術音楽にかかわる多彩な研究が行われるようになっていく。日本の社会学でも、ポピュラー音楽だけでなく、合唱、音楽祭、音楽雑誌、オーケストラと地域との関係など、芸術音楽にかかわる研究が少しずつではあるが行われるようになっていく。また社会学以外でも、社会構築主義の視点に立った音楽研究や音楽と権力、音楽とジェンダーとの関係に焦点をあてた社会的な研究も行われている。しかし、近年の国外での音楽や音、聴覚についての研究を取り入れた研究はまだ十分に行われていない。また音楽と「社会との関係」を対象とした研究であっても、当時の社会的コンテクストを示すような研究が多く、さまざまなものと社会との関係についての研究を蓄積してきた社会学などでの研究成果や理論展開を活用しきれていない状況にある。そのため、歴史的な研究の対象を追加する（このことじたい重要であるとはいえ）にとどまるような状態になる傾向も見られる。

(3) 本研究で芸術音楽を研究対象とする理由と意義

①聴覚文化論やサウンド・スタディーズなどの近年の音と聴覚、聴取についての研究は、現代のさまざまな社会、文化での「日常」のなかの音に焦点をあてる傾向にあり、芸術音楽についての研究には十分に取り入れられていない傾向がある。しかし、音の社会的位

置づけ、音とノイズの関係など、聴覚文化論は芸術音楽にとっても重要な視点が多く存在しているため、本研究で芸術音楽を研究対象にする。

②「近代」について考えて行く上で、モダニズムの芸術の理想とみなされた「芸術音楽」は、それをめぐる言説の量や質から言っても、また主体と独創性・創造性、身体／精神、ジェンダー、ナショナルイティ、宗教などとの結びつきの点からも避けて通ることのできないテーマである。

(4) 本研究でマックス・ウェーバーの音楽社会学（芸術社会学）を取り上げる理由

①ウェーバーは西洋近代を「合理化」があらゆる領域で進展する過程としてとらえており、『音楽社会学』でもウェーバーは西洋近代音楽の「合理化」に焦点をあてている。ウェーバーの音楽社会学（芸術社会学）をとりあげることで、音楽研究にとどまらない、芸術音楽を通して「近代」を批判的に考察する研究を展開することができる。

②本研究の研究代表者は、ウェーバーの『音楽社会学』のなかで「音楽的聴覚」の問題が潜在的に重要な位置を占めていることをこれまでの研究で明らかにした。ウェーバーの西洋近代音楽の「合理化」と「音楽的聴覚」（の合理化）の関係は、聴覚文化論、サウンド・スタディーズの今後の展開にとっても重要な視点になると考えられる。

③ウェーバーに関しては膨大な研究が行われてきたが、ウェーバーの音楽研究については十分な研究が行われていない状態にあり、音楽研究についても研究を進展させる必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点である。①西洋近代の「芸術音楽」を題材に、音楽社会学、近年国外で発展しつつある聴覚文化論やサウンド・スタディーズに関する研究などの研究成果を取り入れ、近代（モダニティ）の芸術と音・聴覚、社会との関係を明らかにする。②近年の音楽や聴覚文化の研究をふまえ、本研究の研究代表者のこれまでの研究を発展させ、マックス・ウェーバーの音楽社会学（芸術社会学）の再検討を行う。特に芸術の「技術」に焦点をあてるウェーバーの芸術社会学と音楽における「カノン」（聖典）形成との関係を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、国内外の音楽、聴覚文化論、サウンド・スタディーズ、視覚文化論、感覚、知覚、身体、マックス・ウェーバーなどに關する文献を用いて研究を行った。

4. 研究成果

本研究の成果については2つの論文としてまとめ、公表したため、まずこの2つの論文

での研究成果について説明し、次に当初予期していなかった新たな知見や今後の展開の展望について説明する。

(1) 視覚文化についての研究と人文社会科学での諸感覚の研究、聴覚文化の研究の比較および聴覚文化論、サウンド・スタディーズの課題

本研究では、近年の諸感覚についての人文社会科学諸分野での研究、聴覚文化論、サウンド・スタディーズについて、諸感覚の研究のなかでも特に先行して研究が展開した視覚についての研究、視覚文化論での研究をもとに、特に研究上の視角について比較し、検討を行った。またそれらと近年の感覚についての社会学での研究についても比較検討を行った。

これらの研究に共通する視点は、「生の」身体的経験はけっして「生の」ものではなく、社会を媒介にしたものであり、社会と文化によって形づくられるもの、感覚の社会構築性という視点である。また感覚はそのときどきの「場」の影響も受け、さらに記憶の影響も受ける。そして、そうした場や記憶じたいも社会の影響を受けているという意味で、感覚は幾重にも社会と文化の影響を受けたものであり、まさに社会的な対象ともいえる。

諸感覚は、人間関係、アイデンティティ、階級、差別、審美的差別、礼儀作法、医療と健康、宗教、環境、科学技術、ライフスタイル、流行、イメージなどととも社会秩序や支配、権力、規律＝訓練とも結びついている。聞いていいもの、よくないもの、聞いていい人、聞いてはならない人、触れていいもの、悪いものなどが社会的に形成されてきた。また、感覚の秩序により、そこからの「逸脱」も作り出され、それは「医療化」される場合もある。さらに感覚にはジェンダーが結びついており、より高度な感覚や知覚は男性的なもの、より低次な感覚と知覚は女性的なものとされ、知的活動は男性、身体世話話は女性などといったように職業や諸活動にも結びついている。また、そもそも感覚を特定のカテゴリー（たとえば「五感」）に分けることじたいが社会的、文化的なものである。

こうした諸感覚と社会、社会秩序、権力などのかかわりにもかかわらず、社会学での諸感覚についての研究、特に視覚的表象や「まなざし」以外についての研究は、ウェーバーやゲオルク・ジンメル、ピエール・ブルデュエ、そして実証的なさまざまな研究のなかにも断片的に見られるとはいえ、他の分野での感覚の研究と比較しても遅れた状態にある。しかし、感覚についての研究に社会学の研究成果を活用することで、感覚の社会学の展開とともに、さまざまな研究対象や研究視角への展開の可能性が存在している。

こうした近年の聴覚や諸感覚についての人文社会科学での研究は、身体、感覚という医療や自然科学の対象、つまり「自然」と、

「近代」(モダニティ)や「現代の社会」ということで暗黙のうちに前提とされる特定の社会、場所において「自明」になっているものを問い直すさまざまな試みの一つであり、また視覚中心の学問の知のあり方を問い直すものでもある。

さまざまな感覚のなかでも本研究では、聴覚に焦点をあてる。それは世界が音に満ちているだけでなく、本研究の研究代表者のこれまでの研究をもとに展開できること、近年、聴覚文化論、サウンド・スタディーズの、特に国外において盛んに展開された興味深い研究が多くあるためである。

聴覚文化論、サウンド・スタディーズの研究は多彩なものであるとはいえ、基本的には研究上の視点および方法は、他の感覚の研究に先んじて展開してきた視覚文化についての研究がもとになっていると言える。視覚についての研究と同じく聴覚についての(また他の諸感覚についての)人文社会科学的研究では、フォスター編『視覚論』でも視角について指摘されている次のようなテーマ、社会的、文化的構築物としての感覚と言説(および言語)、主体の形成、身体という厚みと生理学、心的なものや精神医学、障がい(聴覚では聾や難聴など)と烙印(スティグマ)、錯聴、支配と権力(聴覚の政治性)、「職場や家族、教育・医学・法律・財産・宗教・政治など」(Bryson 1988=2007: 153, フォスター編『視覚論』平凡社、樽沼範久訳)のコンテクスト、それらにかかわる技術や機器、これらのものの歴史的な変化と文化的多様性(聴覚制度の多様性)が、研究上の基本的な視点になっている。

聴覚だけでなく、諸感覚についての人文社会科学での研究では、視覚中心の近代(モダニティ)に対するものとして、視覚以外の感覚を位置づけること、視覚文化と視覚中心のこれまでの学問にたいする「代替的なもの」(オルタナティヴ)を提示しようとするものも多く見られ、そうした二項対立に批判的な論者においてさえ、そうした傾向が見られることもある。

こうした単純な視覚と聴覚、視覚と他の感覚の二項対立にたいしては多くの批判もあるが、ここには、たとえば聴覚文化論、サウンド・スタディーズが、これまでの研究にたいして何を提示できるのか、という問題がある。既存の視角と方法を用い、これまで相対的に研究が少なかった対象について研究を行うのか、あるいは聴覚、サウンドに焦点をあてることで新たな視角や方法を展開することができるのか。後者の場合、『視覚論』でも問題にされた「代替的なもの」(オルタナティヴ)の提示への批判についてどのように答えるのか。

また視覚をはじめ他の諸感覚にもかかわるが、聴覚文化論、サウンド・スタディーズについてはもう一つの二元論の問題がある。自然と社会である。感覚に関する近年の人文

社会科学での研究では、感覚は社会的に構築されるとされる一方、身体という「自然」、身体の物質性が強調されることもあり、ヴァイト・アールマン (Veit Erlmann) やジョナサン・スターン (Jonathan Stern) は、感覚、音という現象と歴史を自然と社会、文化の「中間」(in the middle)、「中間地点」(in-between)に位置づけている。

この自然と社会の「中間」という位置づけについては、聴覚文化論とサウンド・スタディーズという音と聞くこと、聴くことについての研究の名称とともに検討が必要である。その場合、音の世界に閉じこもらず、次のジュディス・バトラーの指摘など、身体と社会、文化との関係について問い、またそれが重要な社会的意味も持つジェンダー論での議論などについても考えてみる必要がある。「セックスを前・言説的なものとして生産することは、ジェンダーと呼ばれる文化構築された装置がおこなう結果なのだ」と理解すべきである」(Butler 1990=1999: 29, 『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳, 青土社)。

そしてこのことは、スターンや、他の感覚についての研究でも指摘されている「リフレクシヴィティ」にかかわる。「リフレクシヴィティ」についてスターンは次のような説明している。「認識者は認識しようとするものとの関係のなかに自分自身を位置づける必要がある。つまり自分自身の立場と偏見を説明しなければならぬ……聞くためにはある場を占める必要である (Hearing requires positionality)」(Stern 2010: 4, *The Sound Studies Reader*, Abingdon: Routledge)。感覚は、特定の場と結びついている。社会科学、社会学における研究と研究者の立場、位置について考えたのがマックス・ウェーバーであり、スターンも参照しているピエール・ブルデューである (この問題については多くの社会科学での研究が存在していることは言うまでもない)。

「リフレクシヴィティ」について問題にする場合、ブルデューは「それを生みだした社会的諸条件に関連づけてやるだけでは充分ではない」と指摘し、「問わなければならないのは、問いかけそのものだ」と述べている (Bourdieu 1979=1990: 18-9, 『ディスタンスクシオン I』石井洋二郎訳, 藤原書店)。

聴覚文化論、サウンド・スタディーズにおいて、多様な分野において多彩な研究が繰り広げられているが、上記の二元論や「リフレクシヴィティ」にかかわる問題についてさらに検討が必要である。

本研究では、この点についてウェーバーの音楽社会学とウェーバーの社会学の方法論について検討を行った。ウェーバーに焦点をあてたのは、本研究の研究代表者のこれまでのウェーバーの音楽社会学に関する研究をもとに音と聴覚についての議論を展開できること、また研究者の研究の位置について、また方法論についてウェーバーが、こんにち

の社会学の基盤となる数々の議論を展開しているからである。

(2) ウェーバーの音楽社会学、社会学とサウンド・スタディーズ

近年の感覚についての研究や聴覚文化論、サウンド・スタディーズにおいて、たとえばスターンの『聞こえる過去』でのブルデューへの言及やジョナサン・クレリーの『知覚の宙吊り』でのエミール・デュルケムの著作についての検討など、社会学者の著作が取り上げられることがあるが、(身体社会学を除く) そうした領域での社会学における研究が依然として少ないことが理由とはいえ、感覚についての人文社会諸科学での研究や聴覚文化論、サウンド・スタディーズに社会学での研究成果が活用されれば、さらに多様な研究の展開が見込まれるだろうし、本研究の目的もそこにある。

感覚についての人文社会諸科学での研究や聴覚文化論、サウンド・スタディーズでは、近代 (モダニティ) での「合理化」がしばしば取り上げられているが、そのことについて研究したマックス・ウェーバーについて取り上げられることはなぜか少なく (『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の一部が取り上げられる場合はあるとはいえ)、またその音楽の研究 (未完の草稿として残された『音楽社会学』) にいたっては、ほとんど取り上げられていない。しかしウェーバーの『音楽社会学』が取り上げることがないのは、それが今日の研究の視点から見て重要なものではないというわけではないことは次のことも言えるだろう。

2015年に出版されたサウンド・スタディーズのキーワード集『*Keywords in Sound*』(David Novak and Matt Sakakeeny eds., 2015, *Keywords in Sound*, Duke University Press) の「音楽 (music)」の項目において、その項目を担当したマツ・サカキニ (Matt Sakakeeny) は、「音楽」として境界づけられた、「恣意的な」音の領域は、数千年かけて徐々に形づくられてきたと指摘し、その歴史の概略を示しており、そこにおいて、その「科学的性質、審美的性質、社会的性質」に注目している。

「音楽」として境界づけられた音の領域の恣意的な組織化の問題。これがそのキーワード集のおよそ100年前、ウェーバーが音楽についての研究で取り組んだ課題である。

ウェーバーは音楽についての研究で音楽の音組織と音楽をめぐる「技術」に焦点をあてているが、本研究では特に「技術」に焦点をあてるウェーバーの音楽研究の視角と方法論について、ウェーバーの方法論に関する著作から検討し、さらにウェーバーの音楽社会学について、芸術音楽とドイツのナショナリティについての研究のいくつかのものを通して検討した。それは上述のように聴覚文化論、サウンド・スタディーズの視角、方法

論について検討し、展開するためである。

ウェーバーが音楽を含む芸術における研究において「技術」を研究対象とするのは、芸術についての科学研究、社会学の方法を検討した上である。またウェーバーが「合理化」を取り上げるのは、それによって非合理的なものもとらえられるようになるからであった。

芸術の「技術」に焦点をあてることについてウェーバーがまとめた議論を展開しているのは、「社会学および経済学の『価値自由』の意味」においてである。そのなかでウェーバーは「審美的評価」をまじえずに、経験的に観察可能な芸術の側面を問い、それを芸術の「技術的手段」にもとめている。ここに、しばしば批判の対象となっている審美的評価を伴う「偉大な」作曲家や「正典(カノン)」の研究とは異なる形のウェーバーの音楽史への視角が提示される。

さらにウェーバーは音楽の技術に注目するなかで、技術にかかわる「芸術意欲」も問題にしている。このことにより、類似した「芸術意欲」が存在していても、その意欲が存在した時代と文化の技術の状況により、音楽の技術が異なる方向へと展開していった過程を描こうとしている。

これは技術決定論ではなく、意欲と技術の相互作用の過程であり、スターンが『聞こえる過去』でも採用している技術に先行するものに注目する技術と社会との螺旋的な過程と共通する視点でもあり、またスターンの視点は、「歴史的にかくなくて他とはならなかった」根拠と過程を明らかにしようとするウェーバーの課題とも重なっている。

ウェーバーはこうした意欲と技術との関係について、その社会的、文化的、宗教的、経済的、産業的背景に注目し、そこで「無名の」技術者たちや集団に注目している。そしてそこから音楽を聞く／聴くという経験、「われわれの耳」、「音楽的聴覚」の形成と、その技術への影響という視点が出てくる。ウェーバーは次のように指摘する。同じ音でも「……異なったものと感ずることができるだけでなく、まさに、主観的に、異なったものとして“聴く”ことができる」(Weber [1921] 1956=1967: 202, 『音楽社会学』創文社)。

この点についてウェーバーは十分に議論を展開していないが、この視点を展開すると、ウェーバーの音楽社会学を音楽と音楽的聴覚についての態度形成としての「音楽的エートス論」として展開でき、この点からもサウンド・スタディーズや聴覚文化についてのこんにちの多彩な研究とウェーバーの音楽研究を関連づけることが可能になる。

このように、ウェーバーの芸術についての議論は、こんにちの聴覚、感覚についての研究にとっても重要かつ有意義な視点を提示している。

ところで、ウェーバーの音楽についての研

究は、ウェーバーの社会科学、社会学の方法論についての研究をもとしたものではあるが、このウェーバーの視点や問いたいについても検討する必要がある。

テオドール・アドルノは『音楽社会学序説』で「民族的要素は最も小さな細胞と『音』の中にまで浸透している」(Adorno [1962] 1997=1999: 317, 平凡社)と指摘している。そうだとすると、ウェーバーが『音楽社会学』で対象とした音組織にも「民族的要素」が浸透していることになる。またウェーバーの技術にたいする視点(そこからウェーバーは音組織に注目した)から言っても、つまり技術への諸集団の意欲や、社会、文化等の影響を考えてもそうなる。そして、そうした音(音組織)への注目という視点についても「民族的要素」が浸透していることになる。まさに「リフレクシヴィティ」である。

シリア・アップルゲートは「ドイツ音楽とは何か? — 国民の創出における芸術の役割の考察」で次のように指摘している。「[一部の作曲家の例外がいるが] 全体としてのドイツ音楽は、それを生みだし、正典化した文化から異常なまでに独立したものとして一般的に認識されている……実際、私たちはおそらくドイツの音楽に、わずかなものであれ、ナショナルないかなるものも聞くことはない。そうだとすると、同じことがドイツ人自身にもあてはまるわけではなく、18世紀後半から20世紀にドイツ人が『自分たちの』音楽について書き、演奏し、考える時には特にそうである」(Applegate 1992:21-2, Applegate, Celia, 'What is German Music? Reflections on the Role of Art in Creation of Nation,' *German Studies Review*, Vol.15, 括弧内引用者)。

ウェーバーが生き、そして音楽について考えたのは、まさにその時代であり、ウェーバーの音楽社会学における和音(和声)という視点のみならず、楽器と楽器の選択、つまりヴァイオリン、オルガン、ピアノという選択も、さらに音楽と「理性」(合理性)という視点じたいも、ドイツにおける音楽の、またドイツの音楽についての18世紀後半からの考え方の影響のもとに、その時代の「音楽的エートス」のもとにあった。

以上が本研究での主要な成果で明らかにした点である(より詳細は以下の論文①②を参照)。

(3) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

諸感覚のなかでも音と聴覚に焦点をあてるサウンド・スタディーズ、聴覚文化論は、こんにち盛んに研究が行われるようになっているが、社会学における研究は国内外ともにまだ十分でなく、特に国内での研究は著しく不十分な状態である。こうしたなかで本研究は、社会学での諸研究をもとに、特に研究上の視角と方法論に焦点をあてることで、こ

れまでの研究であいまいにされている点や課題を明らかにした。また、本研究においてサウンド・スタディーズ、聴覚文化論において国内外ともにまだほとんど取り上げられていないマックス・ウェーバーの音楽社会学およびその方法論に関する著作とそれらに関連づけた。このことによってウェーバーの社会学をはじめ、社会学の諸研究とサウンド・スタディーズ、聴覚文化論を結びつけ、展開する上での視点および基盤を提示することができた。

本研究では、これまでの研究で示されてこなかった点を複数提示しており、これらの点において本研究は、国内外ともに重要な研究成果になりうるものとする（本研究について英文での発表をまだ行っていないが、さらに研究を発展させたものを英文でも発表予定である）。

(4) 当初予期していなかった知見および今後の展望

本研究において、当初予期していなかったさまざまな知見を得ることができた。この点は、上の研究目的と研究成果からも明らかかもしれないが、たとえば、本研究代表者のこれまでの研究において、ウェーバーの音楽社会学を「エートス」論として展開するという安藤英二の議論に否定的な考えを示していたが、本研究を通して、安藤とは異なる視点においてではあるが、ウェーバーの音楽社会学を「エートス」論として展開できる可能性を見出すことができた。これは研究当初、予期していなかったことであり、またこのことによってウェーバーの音楽社会学とサウンド・スタディーズ、聴覚文化論をより関連させて展開できる可能性を示すことができた。

また、本研究代表者がこれまでに行ってきた近代の都市空間についての研究、1980年後半から生じた地理学と社会学などにおける「空間論的転回」と、サウンド・スタディーズ、聴覚文化論の研究が、その対象のみならず、研究上の視点などについても当初考えていた以上に関連していることがわかり、その点での今後の研究の展開の方向性と可能性をつかむことができた。

以上の点について今後の研究で発展させていくとともに、これら以外の当初予期していなかった点については今後の本研究代表者の研究を通して示していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 和泉 浩, 「マックス・ウェーバーの音楽社会学と音楽の技術、「音楽的エートス」——ウェーバーの音楽社会学とサウンド・スタディーズ」, 『秋田大学教育文化学部紀要』, 秋田大学, 第 72 号, 2017,

pp.9-20. 査読なし.

- ② 和泉 浩, 「感覚の社会学、聴覚文化の社会学の視角」, 『秋田大学教育文化学部紀要』, 秋田大学, 第 71 号, 2016, pp.25-36. 査読なし. NCID: AA12685502, https://air.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2690&item_no=1&page_id=13&block_id=21

6. 研究組織

(1) 研究代表者

和泉 浩 (IZUMI, Hiroshi)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：4 0 3 6 1 2 1 6